

## 博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	伊藤 潤一郎
論文題目	不定の二人称への言表行為 ——ジャン＝リュック・ナンシーにおける言語の問い——
<p>審査要旨</p> <p>伊藤潤一郎氏の博士学位請求論文は、フランスの現代哲学者ジャン＝リュック・ナンシー（1940-）の共同体論の形成過程とその変遷を、1960年代の初期から現在まで追い、その哲学的な根本構造を解明しようとするものである。審査会の審議・討議において多種多様な議論が展開され、きわめて充実した濃密な審査会となった。そのすべてを記すことはできないが、本論文の評価される点として、主に以下の三点が挙げられた。</p> <p>1. 先行研究において指摘されていながらもこれまで等閑に付されてきたナンシーと人格主義との関係について明らかにしたこと。著者は特にナンシーが1960年代に人格主義の雑誌『エスプリ』誌に発表した諸論文を、当時の構造主義的な言説状況における『エスプリ』誌の立ち位置との関係から読解し、構造主義のもたらした言語学的な成果をナンシーが取り入れて、『エスプリ』誌創設者のエマニュエル・ムーニエの思想を言表行為の視点から批判・継承しようとしていたことを解明した。さらにナンシーは1970年代には、いったんデリダの脱構築思想に接近し、その思想的養分を吸収するが、その後1980年代後半以降、強く共同体論に傾斜してからは、脱構築的発想を生かしながらも再び人格主義の諸概念や用語を（デリダに反して）多用するようになったことを指摘し、これをナンシー独自の「古名の戦略」として分析した。ナンシーと人格主義の関係については、これまでほとんど研究されてこなかったところであり、この問題に関する本格的な研究として世界でも初めてのものとして、審査員から高い評価を受けた。</p> <p>2. ナンシー哲学の初期から現在までを全般的に見通す「不定の二人称」という鍵概念を提出し、それを1970年代、1980-90年代、2000年代以降の各時期の主要著作の精緻な読解によって論証したこと。従来のナンシー研究は、彼の哲学を「非人称性の哲学」（ブランショやデリダの影響下における解釈）とみなすか、「人称的な個人性の哲学」（実存主義的な解釈）とみなすかの両極に分裂してきた。優位なのは「非人称性の哲学」派であるが、著者は、ナンシーがほとんど一度も「非人称性」という言葉を使用しなかったことがないという事実を指摘したうえで、この両極をつなぐ概念として「不定の二人称」への言表行為（「誰でもよいあなた」への呼びかけ）を提案し、この概念を軸にして、「分割＝分有（partage）」「特異性」「共同性」「感覚＝方向＝意味（sens）」「キリスト教の脱構築」といったナンシー哲学の主要概念を包括的に分析し、それらの諸概念の土台として「不定の二人称への言表行為」の重要性を証明した。1.が思想史的な価値をもつ仕事だとしたら、2.はナンシー哲学の理論的骨格にかかわる仕事であり、しかも「不定の二人称」という、ナンシー自身も使用していない鍵概念を申請者が発見し、ナンシー哲学の大きな見取り図を理解可能にした点は特筆に値すると評価された。</p> <p>3. 「意味」や「共同体」といった概念をめぐる晩年のデリダとの対立について、ナンシー独自の問題意識をえぐり出し、ナンシーが単なるデリダのエピゴーネンではない（ナンシー＝人格主義の脱構築者）ということを説得的に主張したこと。特にデリダ世代（構造主義、フーコー、ドゥルーズら）が傾斜しがちな「非人称性の哲学」の流れに対して、「非人称性」の構造論的な問題の重要性を十分に理解したうえで、それでもあえて「人称性」に「賭ける」というナンシーの姿</p>	

氏名 伊藤 潤一郎

勢を明らかにし、ひるがえって「非人称性の哲学」が抱える問題性を浮き彫りにした。言語行為や他者との関係性は、単なる構造主義的な枠組みだけで理解したり実践されうるのではなく、他者への欲望、届いて欲しいという根源的な欲望との関係で理解する必要があるというナンシーの思想を明らかにしたことは、現代の情報ネットワーク社会やメディア社会に対する問題提起としても価値があると評価された。

論文の問題点としては、あまりに明晰な哲学的図式化と整理のために、ナンシーのテキストがもっている「肉感的」な部分、断片的で詩的なエクリチュールが切り落とされているという指摘がされたが、その点については著者も自覚的であり、本論文は、一貫した理論的な構図をいまだ提出できていない現在のナンシー研究の状況を鑑みて、あえて（多少の暴力性は承知のうえで）ナンシー哲学を貫通する理論的な骨組みの「抽出」に作業を集中させたと返答した。

審査会は14時30分から18時30分までの長時間にわたったが、各審査員からの鋭い質問に、申請者は真摯かつ明晰に応答し、その口頭における対応能力と説明能力には審査員一同大きな感銘を受けた。

以上、本論文は今後のナンシー研究の基礎となる充実した内容であり、博士学位を授与するにふさわしいと満場一致で判断した。

公開審査会開催日	2020年1月24日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	藤本 一勇	フランス現代思想	
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	西山 達也	哲学	博士(ストラスブール大学)
審査委員	慶應義塾大学商学部・准教授	渡名喜 庸哲	哲学・倫理学	博士(パリ第7大学)
審査委員				
審査委員				